

【書評】『ウィリアム・オスラー：ある臨床医の生涯』

澤 浦 博

本書は1999年に出版されたMichael Bliss著の“*William Osler: A Life in Medicine*”の日本語訳（梶龍児監訳、三枝小夜子訳）である。手紙や日誌や回想録や出納簿などの膨大な資料が駆使された、事実に基づく、序と13の章から成るウィリアム・オスラー博士の伝記であり、かつオスラー論ともなっている。オスラーははじめ両親や恩師の写真、さらに彼と関わりのあった人たちの写真も掲載されている。オスラーは19世紀後半から20世紀初頭にかけてマギル大学、ペンシルバニア大学、ジョンズ・ホプキンス大学、オックスフォード大学の教授を歴任し、医学教育に熱意を傾け、今日の医学教育の基礎を築いた。著者ブリスは、とかく偶像視されがちなオスラーを理想的に美化するのではなく、客観的に結構人間臭い面も描写している。人物名が非常に多く出てくるので、その点は少し煩雑であるが、訳文はよくこなれた日本語で、読みやすい。ある種の肺炎患者に対して行っていた瀉血とか、腸チフスの初期にみられる頭痛に対するヒルを利用した瀉血など、オスラーの功を奏さなかった治療例もいろいろ紹介されている。

逸話も豊富に挿入されている。例えば、オスラーは1885年にはアメリカの代表的な詩人ウォルト・ホイットマンを診察している。ホイットマンは、基本的には自分の主治医を気に入っていたようである。彼は筆記者に、「彼は好人物で、賢そうだ。いや、彼は賢い。彼には、相手を安心させる雰囲気がある。のんきを装って問題を却下する彼のやり方を、私は好まない。けれどもそれは、彼が確立した方針の一部なのかもしれない。人を元気づけようとすることに、私は反対しない。それが本質に根ざしているのか、推測にすぎないのかはわからない。いずれにせよ、オスラーはそのやり方を貫いている」と口述している。

また、オスラーは1901年に4年生のガートルード・スタインに学位を認めないという前例のない判断をした。ジョンズ・ホプキンズ大学を中退したスタインが、その後、著名な作家、美術収集家、サロンの常連になったことは、よく知られている。

オスラーの人柄については「第6章 誰もが彼を崇拜している」と「第7章 アメリカを代表する偉大な医師」が特に詳しい。この2つの章では、円熟期のオスラーとその結婚生活も紹介されている。外科医長ウィリアム・シュアート・ホールステッド、医学部長であり、病理学教授のウィリアム・H・ウェルチ、婦人科学教授のハワード・アトウッド・ケリー、薬理学教授ジョン・J・エイベルなど、ジョンズ・ホプキンズ大学の同僚たちについての記述もふんだんにある。同僚たちは、「それぞれ性格面や教育面で欠点はあったものの、彼らがかもしだす雰囲気は、大学を比類なきものにする一助となった。彼らは皆、医学と医療の両面で、全米一、世界一になることをめざしていた。19世紀の医学の驚くべき成果とアメリカの経済成長に支えられた彼らの理想主義は、20世紀のめくるめく可能性をしっかりと見据えた、非常に特殊なものだった」と著者のプリスは述べている。ジョンズ・ホプキンズ大学は、国内外のさまざまな結びつきを通じて、アメリカの医学と健康を尊重する精神を20世紀に導いていくことになる。ホプキンズの医学部で訓練を受けた若者は、研究者や教師になった者だけでなく、開業医になることを選んだ者も、アメリカ全土でなんなくトップの地位につけた。

オスラーは病棟の入口からみるだけで、そこにいる患者一人一人のどこが悪いのかを言い当てられる名医だったという伝説がある。ただし、誤診もあった。著者は、第2期の梅毒と痘瘡を間違えたオスラーの不名誉な経験があったことを紹介している。また、著者は偉大な診断医オスラーも、ホプキンズの3年生の「観察」の授業で、大勢の前で滑稽な間違いをしたことがあることを述べている。ある学生が患者を観察し、問題があると思われる点をすべて列挙したと思ったところで、オスラーが患者の目を見るようにと大声で言った。一

方の目の瞳孔が、他方よりも大きかったのだが、実はそれは義眼だった。

オスラーは決して聖人君子ではなく、様々ないたずらや悪ふざけで周囲の人たちを楽しませたり、怒らせたりもしたそうである。ある看護婦は、自分がきちんと並べておいた夕方の薬をオスラーがすべて混ぜてしまったことを決して許さなかったという。別の看護婦は、スープが入ったボウルにナプキンをかけて運んでいたところ、オスラーが不意にそのナプキンを指で押し、スープの中に入れてしまったので、「あなたがどなたか存じあげませんが、私がこれまで出会った中でいちばん意地悪な人です」と彼に食ってかかったそうである。この話を聞いたオスラーの妻は、病院まで出かけて行き、夫の無神経さを謝罪した。

男性であれ女性であれ、「いたずらっ子」になっている時のオスラーの操縦法を知る者はいなかった。彼がホールステッドの手術室に突然入ってきて、1つ目の滅菌装置に帽子を、2つ目にステッキを、3つ目に手袋を入れてから、「どんな調子だね？」と涼しい顔で尋ねると、立腹した外科医は、「オスラー、君はもう少し大人になれないのかね？」と言うことしかできなかった。

オスラーには上記のような側面もあったが、彼に対する人物評は、ほぼ非の打ちどころがないものである。オスラーとともに病棟や解剖室に入ったペンシルバニア大学の学生の1人は、「彼の病棟での最初の授業に、私たちは目をみはりました。病棟に入った彼は、喜びのあまりうきうきしてきて、瞬く間に、私たち全員の好奇心に火をつけました。……オスラー先生は学生に、疾患は、医師と呼ばれる人々が生計を立てるために学ばなければならない忌まわしいものなどではないと教えました。彼にとって、疾患は、適切な訓練を受けた頭脳の持ち主が、深い喜びと高揚を感じながら追究できるものであり、芸術家が鑑賞する偉大な絵画や、音楽家が耳を傾ける偉大な作品のようなものでした」と記している。

オスラーの回診について、のちにハーヴァード大学医学部長になったヘンリー・クリスチャンは、「オスラー博士が回診をする姿は、気さくでありながら威厳があった。緊張していた学生や患者は、たちまちくつろいだ気分になっ

た。彼の解説には形式ばったところがなく、やや行き当たりばったりなところさえあった。それでいて、説明を受けた学生の頭には、患者とその疾患について、驚くほど完全な記述が入っているのだ。オスラー博士の回診は、彼の人柄をよく反映していた。身だしなみがよく、いつもフロックコートを着ている彼の外見は、典型的な顧問医のそれであり、彼と近づきになった人々は皆、彼に敬意を払った。それにもかかわらず、彼には偉そうなところがまったくなかった。彼のきらきらした目や、軽やかな足取りや、当意即妙の言葉や、愛想のよい態度や、夢中になって喋りながら助手や学生や友人の肩に手を置く癖は、彼のクリニックや回診を打ち解けた雰囲気にした。学生やその仕事ぶりについて、鋭く、忘れがたい批判を言うことはあったが、つらく当たったり、意地悪をしたりすることはなかった。彼の叱責は、相手に尊敬と愛情を呼び起こすものであり、恐怖を感じさせるものではなかった」と証言している。

オスラーは活気に満ち、親しみやすく、楽しげで、魅力的で、ひょうきんだった。「その陽気でポジティブな性格は、患者から年長の同僚まで、すべての人を魅了した。現代の伝記作者は、著作の信憑性を高めるために、その人物の意外な欠点を見つけ出してくるものだ。ところが、オスラーについては、誰もが口を揃えて称賛しているため、伝記作者を当惑させている。後述するように、同僚のなかにはオスラーのやり方を時代遅れだと思う人も数人いたほか、いろいろなことに手を出しすぎて一つ一つが浅くなっていると思う人や、あまりにもアメリカナイズされてしまったと考える人もいた。けれども、オスラーを嫌う人はいなかったし、彼のことを悪く言う人もいなかった。1890年代のオスラーは、ジョンズ・ホプキンズ大学医学部の一教師にすぎなかったにもかかわらず、当代で最も愛される医師の1人になろうとしていた」と著者のプリスは述べている。

フランク・シェパードは、「彼のようにはっきりと人を引きつける『オーラ』のある人を、私はほかに知らなかった。それは、見ることも、感じることもできる『何か』だった……『磁石のように人を引きつける魅力』という陳腐な言い回しが本当の意味で当てはまる人がいるとすれば、それは彼だった」と記し

ている。

著者によれば、学生にとって、オスラーは指導者以上の存在、尊敬すべき偉人以上の存在だった。当時は「ロールモデル」という言葉は使われておらず、おそらくそれに近い言葉は「理想」であった。ホプキンスの学生の多くにとって、オスラーはまさに「ロールモデル」あるいは「理想」であった。彼は、診断医として、教師として、著述家としてだけでなく、その物腰、服装、習慣、良書に対する愛情、土曜日の夜に見せる社交性、医師としての生き方に対する信仰に近い使命感の点で、医師の「あるべき姿」そのものだった。女医の草分けの1人であるアリス・ハミルトンは、ホプキンスで大学院課程を履修していた時に、オスラーの助手や学生が全員、彼の歩き方、しぐさ、表情、アクセントをまねているのに気づき、「私はしばしば、準オスラーや半オスラーの群れを見ていました」と述べている。

オスラーは成績の悪い学生をせいぜい「弱き同胞」と評する程度だった。学生についても開業医についても、オスラーが医学の「弱き同胞」について悪口を言うことはめったになかった。悪意ある噂話に対する彼の嫌悪は顕著だった。オスラーがいるところで他の人の悪口を言い始める人がいたら、彼はただちに話題を変えたそうである。

ドロシー・リードは自叙伝で、「ウィリアム・オスラーは、私の知り合いの中ではもちろん、会ったことがあるだけの人物を考えに入れても、最も鮮烈な個性と、立派な心と、すばらしい人柄の持ち主だった。私は、彼ほど偉大な教師を知らない。彼は学生と同僚にインスピレーションを与え、とびきりの紳士であり、医師仲間に対して大きな影響力をもっていた……どの本を読んでも、彼の魅力的な性格と、彼に接する機会に恵まれた患者や看護婦や学生や医師に与えた影響の深さを十分に伝えているものはない。私たち全員にとって、彼は変わることもない導き手であった」と最大級の賛辞を寄せている。

オスラーの患者の多くは、学生と同じように彼を偶像視した。オスラーは、楽観主義、ユーモア、快活さの使い方をよく心得ていたので、彼が時に「元気づけのための一般的な処方」あるいは医師による「元気の注入」と呼んでいた

ものには、非常に強力な効果があった。見通しが厳しい場合には、オスラーは通常、患者のショックをやわらげようとした。特に晩年には、その傾向が著しかったとも言われている。彼は、「注意深い医師が考慮することは一つしかない。それは、いかなる意味でも患者を落胆させないことだ」と記している。オスラーは学生たちに、患者が聞いているところでは彼らを不安にするようなことを言わないようにと注意していた。また、胸の痛みを訴える患者に狭心症であると告げたら、その恐怖で症状が悪化してしまうのではないかと考えて、「迷走神経の神経痛」と説明したこともあったそうである。

本書は単なる一人の医師のサクセス・ストーリーではない。当時の社会や文化的背景も解説した医学史としても興味深い。医学者や医療人が、医学医療の根底にある「医道」を学び、考えるのに最適の書である。また、主人公の生き方は、広く一般の読者をも魅了するだろう。オスラーは医師や医学生への有用な助言や忠告のみならず、面白い警句も残している。例えば、オスラーは講義の際に、メモしやすく、暗記しやすい、短い警句を用いた。彼はのちに、これを「記憶に突き刺さるとげ」と呼んだ。また、フェミニストによりしばしば引用されてきた「人類は3つの種族に分けられる。男と、女と、女医だ」というオスラーの警句は、当時の医学部にあった、女性を敬遠するような雰囲気 요약したものかもしれない。その他一般の読者にとっても、印象深い、心に響く言葉をたくさん残している。さらに、この本でオスラーの業績や活躍ぶりを知ると、海外で、あるいは今風の言い方をすると、グローバルに見聞を広めることの大切さを思い知らされる。医学生には教養課程で是非読んでほしい本である。医学とは何か、医療とは何か、教育とは何かを考える絶好の機会になると確信する。